

「今古風を好みよむもの、猥にことまねぶたぐひあれば……」
 (稿本になく刊本において加えられたもの)
 というのである。

このような言は、注釈を通して万葉ぶりを標榜する真淵の立場と略解の違いといえるのであり、考の文学批評に必ずしも同調しえないところもあつたかと思われるのである。

そして一面ではこれが、宣長の世界への親しみを生み出しているのではなからうか。

こうして干蔭は、真淵の校合書入本を基に、宣長の説、そして久老の説を紹介され、又それらによって考察を深めることもあつて略解を述作しているのである。

そして、簡略を旨とする述作のあり方によるところもあるのであるが、万葉人の位置に自分をおくというよりも現在の自分の立場からの平明化につとめているのであり、又、万葉歌が古今集以下の歌とは違って持っているものをその述作の過程において闡明するということは乏しいのではないかと思うのである。

かぎろひ考

△注1▽「石井氏の調査によると、略解収載の宣長説は五八〇項となつて居る。しかし、恐らく之は歌を単位としたものであつて、引用の説を単位としての延項数は約七七〇項に及んで居る。」(大久保正『本居宣長の万葉学』二〇六頁)

万葉考	略解	巻
1例	3例	四
0	1	五
3	4	七
1	2	八
3	5	十
7	9	十一
2	4	十二
1	2	二十四
0	1	四十八
0	1	九十九
0	1	二十
18	33	計

そして、「万葉考」は、刊本のそれが考にあるか否かの数を示している。

△付記▽片仮名の訓をつけて引用したものは板本、平仮名のそれは刊本の本文である。

市村 宏

「かぎろひ」とはさても面倒な言葉である。だがまた魅力十分な言葉でもある。

中学生の時、生物の時間にウスバカゲロウというのを習ったが、級友Aは薄馬鹿下郎の意味だろうとまじめくさっていったものである。蟻地獄の主が羽化してこの虫になる。薄緑色の、トンボに似た姿態はしているも、消えも失せなばかりの弱々しきで、字を宛てれば薄羽蜻蛉ということになる。道綱の母がその薄命を叙した「かげろふの日記」も蜻蛉日記で通用している。

しかし古事記にも万葉にも「かぎろひ」はあっても「かげろふ」はない。語源を探り出すには、そのもと、そのもとと手繰って上代にさかのぼるのが常だが、ここでも「かぎろひ」は上代語で、「かぎろふ」は平安時代に入ってから転化らしい。「かげろふ」の原形が「かぎろひ」なのである。古事記には迦芸漏肥と書き、万葉には炎・蜻蛉・蜻蛉火また香切火などの漢字表記がなされている。万葉のどの宛字にも火が付きまとい、それが火であることを物語っているかにも見えるのである。旧説ではカギル(光る)に語尾のフの付いた動詞カギロフの語の名詞形とみられたが、これはどうやら誤りで、このヒは特殊仮名遣の上からも乙類だから、この説には不利であった。カギルについては、万葉集中にタマカギルの枕詞が多く用いられ、玉がピカピカ、キラキラ光り輝くの原意である。おなじみの赫夜姫のカグもやはり光り輝く意味で、光子・輝子の元祖だが、もっと古くは影媛のカゲもある。だとすれば、カギルヒがカギロヒになったことは、まず不安なく断定してもよからう。つまり光る火がカギロヒの原義で、火焰・炎のことに外ならなかった。履中記に本難波宮に坐しし時、大嘗に坐して、豊明為す時に、大御酒にうらげて、大御寝ましき。爾に其の弟墨江中王、天皇を取りまつらむとして、大殿に火を著けたりき。是に倭漢の祖、阿知直、盗み出

でて、御馬に乗せまつりて、倭に幸さしめき。……波邇賦坂に到りまして、難波宮を望見りたまへば、其の火猶炳くみえたり。爾亦歌曰はしけく、

埴生坂わがたちみれば迦芸漏肥のもゆる家群つまがいへのあたり

とある。難波宮は弟墨江中王によって放火され、天皇は身を以て馬で大和へ脱出する。その途上、波邇賦坂で天皇が難波の宮を望見すれば炎上する宮殿の火がなおはっきりとみえた。帝は「埴生坂に立って、妻の住む家のあたりを望めば、炎燃えさかる宮殿よ楼閣よ」と歌われたというのである。「其の火猶炳くみえ」たその火を迦芸漏肥といっており、この歌のカギロヒが火焰であることは疑問の余地がない。何時何処で誰が作ったものかは判らないが、この場面にじっくりするが故に、ここに用いられたのであって、陽炎のゆれる彼方に妻の家がみえるというような、長閑な場面ではなかったのである。万葉集にも巻二の二一〇番歌に「蜻蛉火之燎流荒野」があり、その或本歌二一三番歌中にも「香切火之燎荒野」があつて、荒野に妹を焼く葬火を意味するのに、学者は多く「陽炎の燃ゆる春野」と混同し誤解した。人麻呂が妻の死を哭した長歌中に歌う妻の靈魂の行路は、火中を通れた履中天皇と同じく、さように長閑なものではなかった筈である。

二

四 東野。炎。立所見而。反見為者。月西渡。

ここに最も厄介なカギロヒがある。実は厄介ではなく「炎」とカギロヒとはぴたりと合つて、炎をカギロヒと訓んだのは正訓中の正

訓、カギロヒとは正に炎のことであるのに、学者の側が種々の迷を生じ、面倒なものにしてしまったのではないか。

輕皇子宿于安騎野二時柿本朝臣人麻呂作歌

暁 八隅知之。吾大王。高照。日之皇子。神長柄。神佐備世須等。

太敷為。京乎置而。隱口乃。泊瀬山者。真木立。荒山道乎。石根。

禁樹押靡。坂鳥乃。朝越座而。玉限。夕去來者。三雪落。阿騎乃

大野爾。旗須為寸。四能乎押靡。草枕。多日夜取世須。古昔念而。

短歌

哭 阿騎乃野爾。宿旅人。打靡。寝毛宿良目八方。古部念爾。

哭 真草茹。荒野者雖有。葉。過去君之。形見跡曾來師。

哭 (前掲)

哭 日雙斯。皇子命乃。馬副而。御獨立師斯。時者來向。

すなわち「炎」を含む問題の短歌は、「輕皇子宿于安騎野二時柿本朝臣人麻呂作歌」という長歌に添う四首中の四八番歌なのである。全篇、柿本人麻呂が嘗て心事した日並皇子の薨後、その皇子輕皇子(文武)が日並皇子の御狩場であった大和の阿騎野(奈良県宇陀郡宇陀町迫間)に行啓、先代同様の御狩をされた時、同じく從駕して作った力篇なのである。

この歌の制作年次は明らかでないが、持統天皇の即位は朱鳥元年(六八六)で、天皇の三年(六八九)四月十三日日並皇子が薨せられ、一年(六九七)輕皇子(文武)に讓位されたから、その間日並皇子の薨後、文武天皇即位以前の或時期、長歌にみれば「み雪降る阿騎の大野に旗すすき篠おしなべ」の草枕とあるから、冬季と考えてよからう。しかも問題の短歌に「月傾きぬ」とあって、作者が東をみ、ついで西を顧みた時、月は傾いて山の端に残るといふ情

景が描写され、ツキカタブキヌは月西渡と表記されるにみても冬の早晩未明の時刻とみられる。この季節と時間とを考える時、この問題のカギロヒを旧説に従い陽炎と解し、安閑としているわけにはゆかなくなる。その苦しさから曙光説が近頃になって出た。陽炎では冬にも早曉にも合わぬが、一条の曙光ならば射してもよからうと考えられたからであろう。しかしこのカギロヒは東の野に立ったのであって、山の端から一条の光が射し初めたのではない。曙光が野に立ったということがあり得ようか。沢沔久孝博士の注釈や、古典大系本の万葉集が採る説ではあるが、にわかに従い難いのである。

従ってその外にも色々な説がある。万葉が蜻蛉火と書いてカギロヒと訓ませている以上、万葉時代に蜻蛉、つまりトンボをカギロヒと呼んだと考えてよい。だがこの四八番歌のカギロヒにトンボをあてはめて解したのでは意味をなさない。み雪降るといふ冬の未明にトンボが飛び立つ筈もなく、それが人麻呂にみえる筈もないからである。蜻蛉とカギロヒ(カゲロウ)とが動物として混同されていたために蜻蛉をカギロヒに宛てたものと思われるが、カゲロウにせよトンボにせよ、季にも時にも合致せぬこというまでもない。

そこでまた説がある。このカギロヒを糸遊だとするのである。或種の蜘蛛の子は、尻から糸を出し、糸の浮力を利用して巧みに気流に乗り空中を移動する。人麻呂が安騎野の早曉にキャンプを出て、東方にみたものはその糸遊だといふのである。

この糸遊については和歌俳諧に例証が多く、人の興味も引きやすい。まず最近楠本憲吉氏が東京新聞の夕刊に連載中の「新歳時記」中に「かげろう」を書かれたのを引こう。

やがて野山にかげろうのもえる季節が開幕する。このかげろうを

糸遊と書くのは、春秋の天気の良い日、クモの親が、子グモのしりから出る糸を口にくわえ、ちょうど風(たこ)をあげる要領で何匹もの子グモを上昇気流に乗せ、空高く浮動させる。その細いクモの糸が日ざしを受けてキラめくさまが、ちょうど、ユラユラもえるかげろうのイメージに合致するところから、ここに、かげろうのことを糸遊というようになったのである。

この糸遊のことを、英語で Gossamer という。シェークスピアの「ロメオとジュリエット」のなかで、

恋人のまたがるクモの糸は

夏の風に自由にゆれているが

しかも落ちない。

という表現があつて Gossamer が出て来るのである。

かげろうやあまり静かに妻の留守

以上である。親グモが子グモを尻を上げるようにとあるあたりは俳諧であろうが、シェークスピアまで出て来るのがおもしろい。しかしこれも季節は夏とあつて、人麻呂の歌のカギロヒとは合わない。「み雪降る阿騎野」の西空に「月傾く」早曉に、キラキラ光りながら飛ぶ蜘蛛の糸を、人麻呂の目にとらえることはあり得ないからである。

但し、古典の世界でも蜻蛉日記のカゲロウならば、この糸遊がびたりとはまる。本書命名の由来を道綱の母自身がこう説明しているのである。

かく、とし月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をしなければ、こゑあらたまるも、よろこばしからず。猶ものはかなきをおもへば、あるかなきかの心ちする、かげろふのにきといふべし。

とあつて、糸遊は「あるかなきか」のはかなさを象徴するものとして使われたのである。

かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはあるとも思はざらなむ(空穂・俊蔭)

世の中と思ひしものをかげろふのあるかなきかの世にこそありけれ(六帖・かげろふ)

などの先蹤を踏まえての命名であつた。古典文芸の世界での Gossamer は、人麻呂のこの歌には適用できぬにしても、平安文学では重要な素材であつたことが判り、古典大系本「かげろふ日記」(川口久雄校訂)の頭註によつて今少しく俳味抜きの解説を添えておく。

「かげろふ」は中晩秋又は初春、快晴の日ある種の蜘蛛の子が糸を出して、風に乗じて空を浮遊するもので、遊糸・いとゆふ・雪迎えともいう。Gossamer に当る。文選の沈約三月三日詩に「遊糸映空転」があり、千載佳句の春興に「遊糸繚乱碧羅天」(劉禹錫)もある。邦人の作にも菅家文章に蜘蛛と題して「随風転質輕」「秋腸軟」自蜘蛛縷「寸寸分断尽還」とある。田氏家集にも「碧天無罽曳遊糸」「天外遊糸或有無」がある。和歌でも後撰集に「かげろふのあるかなきか」「かげろふのあるかなきかにける世」などと歌う。西欧では「ノートルダム糸」といって、マリアの梭から落ちた糸屑だというのは、わが小野篁の「当_レ天遊織碧羅綾」(春生)に類する。土御門院御集に「大空は誰が織りなせるくれはとりあやに乱るるのへの糸遊」もある。川口氏の伝聞では、秋の午後越後蒲原郡の田圃で氏の旧師がこれを見「蓮の糸」の異名があつたこと、さらに仏人である氏の友人から九月初ブローニューの森で、これを「乙女の糸」(Fils de Vierge)といつたことなど、珍らしい報告

もある。川口氏はさらに、中世期の日本人は観察が粗雑になったのか、気候の変化かでの現象を忘れ、契沖以後わからぬものとなった。日葡辞書の Cagnero の項には「勿然とあらわれたり消えたりする面影か幻のこと」と説明しており、もはや Gossamer だと identify できなくなっている、とされた。

川口氏の説は資料が豊富で其だ有益でもあったが、契沖が問題の歌の解釈に当って、糸遊説を採らなかつたことを指摘しておられるのだから、氏もまた「東野炎」を糸遊と考えておられることが判る。しかしここに挙げられた引例はいずれも春と秋に属して、しかも晴天の昼に作られている。糸遊は或種の蜘蛛の春秋二季の繁殖期に行われるいとなみなものだから、それ以外の季節には現れる筈もなく、また晴天を飛ぶために光って見えるのだが、「み雪降る」季節の月傾く頃に、このような現象があり得る筈もなく、あったとしても人麻呂の肉眼にみえる道理もない。謡曲「葵上」に「月をば詠めあかすとも、月にはみえじかげろふの」と既に謡っている。「かげろふ日記」のカゲロウは糸遊なること疑を容れぬが、「東野炎」は決して糸遊ではない。糸遊そのものは今日でも東北地方ではみられる由を、東北大学教授扇畑忠雄氏から直接承ったことがある。また昭和四十五年九月二日 N・H・K のテレビの「生活の知恵」の「観察する」という番組に滝沢武久・手塚治虫の二氏が糸遊についての経験を語られたが、山形地方ではこれを「雪迎え」といい、飛んで来た糸にくるまれた粟粒大の蜘蛛が奥さんの買物籠にとまったという話であった。「雪迎」という名は晩秋のコバルト色の空にみられる現象だからの名であろう。雲の早い山形地方で、糸遊をみるとやがて雪が来るのである。つまり糸遊の意味でのカゲロウは、蜘蛛の

繁殖期である春秋二季にみられる現象で、これを肉眼でとらえ得るのは快晴の日でなくてはならぬ。糸がキラキラ光って見えるところが、カゲロウの名の因って来る所以なのである。

ささがにのくもらぬ空のいとなればあそぶけしきのたえずもある
かな（俊頼・夫木・三）

さすがに俊頼は糸遊（かげろう）が蜘蛛の糸で、晴天に浮遊することを正確に歌っている。海上百キロの沖にいる船のマストに、この糸遊が降りた例も報告されていて、碧羅と形容された快晴の空をキラキラと光り輝きながら飛ぶ蜘蛛の糸が、世界の文人の興味を惹いたことは右に引用された豊富な作品により証しされているが、しかもこの人麻呂作歌の「炎」とは何の関係もない。カギロヒの原義はかがやく火であり、炎であった。そして炎への連想を持ち得る陽炎や糸遊も、やがて同じ言葉で呼ばれたのに過ぎまい。

三

こうして私はこの歌の「炎」をカギロヒと訓むことを正訓とみ、火炎と解する。嘗て村上可卿氏が「かぎろひは野火である」（「短歌声調」昭和二十六年四月号）ことを提唱され、陽炎のあるべき場所でなく、時が夜更と覚しく、また古代農業が火耕法であったことを立論の根拠とされた。着想が新しく卓見というを憚らぬにも関らずそれほど学界が重きをおかなかつたのは、未だ反論の余地のある、説得力において十分とはいえないものが遣されていたためであるうか。

上代の農法に火田法の行われたことは誰しもが認める。そして火田の行われる季節は山野の草木が枯葉となり、水分を失なって最も

燃えやすくなった冬季が扱ばねばならぬことも当然であるが、
三三三 於毛思路伎。野乎婆奈夜吉曾。布流久佐爾。仁比久佐麻自利。

於非波於布流我爾。

と歌われている頃までが作業の適期であろう。この期を逸すれば青草は繁茂し野火とはならず、既に播種の時節となってしまう。しかし民間に行われる火田の営為を、皇室御猟地でも行われるとみるのは聊か困難ではあるまいか。また冬季はよいが、火田法ならば未明に火を点ずる必要があるか否かにも疑問がある。もちろん火田の野火が数日間も燃え続け、たまたま未明に及ぶこともあり得ようが、その場合この歌の「立つみえて」と感じ方がずれはすまいか。「ぱ」と燃え立つ」感じをこの歌は表現していて、燃え続けていた火をみての歌ではない。狩場のキャンプから未明を起き出た人麻呂は、東方の野にパッと燃え立つ炎をみたのである。そして西空を願れば月が傾いていた。かくしてこの絶唱が生れるに至ったのである。

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも（景行記・弟橋媛）

武蔵野は今日はな焼きそ若草の妻もこもれり我もこもれり

（伊勢物語）

などの名歌は、いずれも古代における火田法、焼畑農業の習俗の中に生れた作品である。火へんに田と書く畑という字も、こうして作られたわけである。

しかし、伝説は「さねさし」の歌を日本武とその妻弟橋媛が賊に謀られて野に誘われ、火攻めにされた時を追想しての媛の歌としている。敵を火攻にする戦術は、スサノヲがオホナムチに対して早くも試みたと古事記にはみえる。火田法により原野に火を放てば、そ

こに潜んでいた野獣たちは算を乱して風下に向って遁走するであろう。それを待ち構えて網なり弓矢なりで狩れば、大勢の勢子をも必要とせず、易々として多大の収獲が得られる。従って開拓のために行われた火田法の発明は、直ちに狩猟法としての火攻めを人に教えに相違ない。それがまた野獣ならぬ敵に対しての戦術に應用されれば、オホナムチや日本武の遭難ともなる。

万葉集にはしばしば鹿火屋が歌われている。収獲期に鹿や猪などの害を防ぐため、田の傍に小屋を作り、終夜火を焚き続けるのである。野獣が火を怖れることを知っての、獣害防衛手段であった。反対にこれを攻撃に用いれば、風上に野火を放った狩猟法となる。阿騎野の未明、人麻呂がみた東の野に立った炎は、この狩猟法の開始を意味するのではあるまいか。

私は最近テレビの動物生態映画で、アフリカで現に行われているこの狩猟法をみた。火に追われた鹿の群が一散に風下へ風下へと遁れて来るのを、待ち構えたハンター達が銃口に火を吐かせて撃ちるのである。

上代、火田法の余得としても相当の山の幸が得られたであろうが、火耕を離れた狩猟法として行われた野火をも考えなくてはならない。それは冬季にのみ可能な狩猟法であった。軽皇子はみ雪降る冬を扱んで、阿騎野にこの狩猟法を試みられたのであろう。そして月は西空に傾いたものの未だ明けやらぬ阿騎野の東方、早くも狩の火は点ぜられたのである。

カギロヒとは輝く火、つまり炎がその第一義である。四八番歌のカギロヒはその第一義に従って、そのまま火炎の義にとればよいのであった。春光うらかな春の野に立ち上る陽炎もまた、その字の

ごとく光り輝く炎を連想させる。そこで第二義を生じてカギロヒの語がそのまま陽炎の義にも用いられるようになった。また蜻蜒火、蜻火などの宛字も使われているのは、トンボがカギロヒと呼ばれていたからで、透明な羽をもつトンボの群が、それをキラキラと秋の陽に輝かせて群舞するさまは、光が空を飛ぶかと思わせ、これもカギロヒの第三義をなすに至った。今は、蜻蜒目の昆虫フタバカゲロウ・ウスバカゲロウの類の総称としてカゲロウの名を残しているが、この虫の姿態のトンボとの酷似は、古代人には両者を弁別せしめず、トンボ中の一類と考えられていたのであろう。ともあれ、トンボはカギロヒと呼ばれていたのである。蜻蜒火・蜻火をその字に宛て用いた所以はそこにあつた。蜘蛛が糸に乗って上昇気流を利用して移動する現象もまた、キラキラと輝きながら晴天を飛ぶさまからの称呼で、陽炎や蜻蜒と同様な理由に基づくと思われるが、これによってカギロヒの転たるカゲロフを含めて第四義をもつに至つたのである。

但し、言葉が数義をもつに至るのは同時にそうなるのではなく、変遷して二義、三義を生じてゆくためには相当の時間が必要である。従つて人麻呂がカギロヒという言葉を炎の意味以外、陽炎その他の意味に使うとは考えられない。「柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌」中二一〇番の長歌およびその或本歌に「蜻火之。燎荒野」「香切火之。燎流荒野」の二例がある。蜻火・香切火の字を宛ててはあるが、カギロヒノモユアラノは妻を焼く野火であつて、長閑な春の野に揺れる陽炎ではあるまい。農業行事が当時の生活暦の中心をなしていたことは贅言を俟つまでもないが、冬から早春にかけて行われた焼畑は、最も重要な農作業で、季節表示の

枕詞としてカギロヒが定著するのは必然の道理であろう。

「悲三寧楽故郷二作歌一首并短歌」の一〇四七番歌は聖武の久邇京遷都によつて荒廢した奈良京を嘆いた歌だが、その中にも「炎乃春爾之成者。」とあつて、下の「露霜乃。秋去来者。」と対句をなしている。このカギロヒも、時代は下つていながら炎字に表記されており、第一義のカギロヒとみるべきであらう。全国一斉に行われる野焼の行事は、春の先駆的行事であつたのである。冬から春へ、古草に新草のまじる頃、あちらでもこちらでも野を焼く炎が上つた。それはいよいよ春が来ることを誰の胸にも強く告げたからである。

一八〇四番歌は「哀弟死作歌并短歌」の長歌であるが、ここにも「蜻蜒火之。心所燃管」とあるが、カギロヒが直接心にかかるいわれはなく「燃え」にかかることはいうまでもないが、それならばこのカギロヒも炎であつて、陽炎でも蜻蜒でもない。心火が熱く燃えるのである。

一八三五番歌は、卷第十の春雑歌中の一首で、

一六言 今更。雪零目八方。蜻火之。燎留春部常。成西物乎。

野火の火の燃え盛る春になつたのだ、今更雪が降るものかというのだから、この野火が冬への訣別を告げるものでもあつた。

このように万葉集にみられるカギロヒの語は、すべて野火の義に解してよいものようである。ただし、前記履中の御製に歌われたカギロヒは、履仲記の前文により炎上する難波宮の火焰であり、万葉集四八番歌は皇室御獵地たる冬の阿騎野に催された軽皇子(文武)の御獵に従つた人麻呂の作品で、これに「み雪ふる」時節や、「月傾」く時間を併せ考えれば、この炎は狩の方法として、潜伏する鹿などを追出すために点けられた野火である。野辺に人を焼く火もま

たカギロヒであった。その他序詞・枕詞として用いられるカギロヒも、農業行事に先駆する焼畑の作業が春の到来を前おれするものであったから、そのための野火に由来するとみるべきで、何も彼も陽炎に帰した旧説は再考されねばならないし、四八番歌の場合の新説糸遊説も疑問とせざるを得ない。野火にもまがふ陽炎も、キラキラ輝いて空を飛ぶ糸遊も、万葉集に起ったカギロヒの転義らしく王朝に入るとカギロヒの語は姿を消し、カゲロウとその語自身も変形して生きつづけた。勿論、擬古的にカギロヒが使われることは、今後も歌の世界には何時までもあり得るし、「カギロヒの夕さり来れば」など一頃のアララギ派では流行語でさえあった。

四

「かぎろひの」が枕詞として用いられた例をみれば、「いはがきぶち」三例、「もえ・もゆ(燃)」二例、ひ(一・日)二例、ほのか

亀と渡海

——日本靈異記上卷第七縁——

四例、ゆふ(夕)二例を挙げ得る。「いはがきぶち」は玉の連想によつてかかり、もえ・もゆはかぎろひが炎なる故の当然のかかり方で「ひ」にかかるのも同様である。「ほのか」にかかるのもホノホなるが故、「ゆふ」にかかるのは赤い夕陽への連想による。

こうして万葉集におけるカギロヒはすべて炎の原義によつて理解することができよう。万葉四八番歌の炎(カギロヒ)は、そのことを教える最適の例であつたのではないか。履中記の迦芸漏肥とともこれをみれば、疑問の余地はなかつた筈と思われる。平安朝以後に生じたカゲロフは、もと同根の語ではあつたが、陽炎・糸遊等の第二義第三義に用いられ、これを逆に万葉集に溯上して解釈したところに誤解を生じたものようである。

契沖以下の諸先学に対し、私自身、小僧何をいうと身を責めながら、なお書いておかねばならぬと思うのである。

(四五・九・三)

守屋俊彦

中西進博士に「鎮水の呪」という魅力的な論文がある。仲哀記の

神功皇后新羅遠征の条の「御魂を船の上に坐せて、真木の灰を瓢に納れ、また箸また葉盤を多に作りて、皆皆大海に散らし浮かべて度りますべし」という一節をとりあげられたものである。この中の灰